

〔駐村研究員だより〕

180 日間で 100 万人 ——安城デンパーク——

やま ぐち しん
山 口 伸

平成 9 年 4 月 29 日にオープンした、安城市のデンパーク（安城産業文化公園）に 180 日間で 100 万人もの入場者があった。休園日を除き実質 1 日平均 5,555 人が入園したことになる。

このデンパークは、年間入園者を 55 万人と予想してのオープンであったから、予想の 2 倍以上ということになる。平日でも 3 千人、日曜、祭日には 2 万人から 3 万人のにぎわいで、千台収容の駐車場も溢れ、田植どきの連休日には農道に 1 km から 2 km ほど駐車され、田植機が田圃に入れず苦情が出るというトラブルも生じた。

このデンパークの設置目的は、「安城市産業文化公園」を地域農業振興のキーステーションとし、かつて“日本のデンマーク”といわれた安城市農業を、再び、新しい時代のニーズに即した、装いも新たな田園都市としてよみがえらせることにある。

すなわち、21 世紀に向けて、農業の健全な発展と農村の活性化を図ってゆくためには、生産者と消費者、都市と農村との交流を積極的に進め、農業生産とその流通にかかわるあらゆるアグリビジネスと農村との間に、新たな共生関係を築きあげることが重要な一つの方策となっているからである。

○公園面積：13.1 ha

○管理運営主体：財団法人安城都市農業振興会（出捐団体等……安城市、あいち中央農協、安城商工会議所、民間企業等）

○公園の設置目的：日本デンマーク・ルネッサンス事業

- ①農村と都市の共存の促進
- ②先駆的農業のモデルゾーンの創造
- ③農業情報の受発信基地化
- ④農・工・商調和のとれた産業振興
- ⑤新しい余暇活動の提案
- ⑥新しい観光資源の開発

○建物整備、施設

- ①デンパーク館 734 m²
（展示室、会議室等、研修室 63 名収容）
- ②クラブハウス 820 m²
（ロビー、体験工房等 計 180 名収容）
- ③ガーデンレストラン 526 m²
（ルーム、ロッジ、屋外 計 274 名収容）
- ④ふるさと館 454 m²
（郷土料理レストラン等 計 115 名収容）
- ⑤マーケット 980 m²
（花卉、農産物、ハム、アイス、パン等）
- ⑥フローラルプレイス 3,604 m²
（花の大温室、視聴覚室、童話館等）
- ⑦地ビール工房 511 m²
（醸造能力 250 kl/年、パブ 80 名収容）

○建物以外の整備

- ①ふれあい広場 5 万 m²
（自然散策路、イベント広場、屋外ステージ）
- ②ちびっこ広場 1,500 m²
（小遊具広場）
- ③市民農園 3,500 m²
（80 区画×25～50 m²/区画）
- ④オーナー農園 4,000 m²
（和梨 3 品種、洋梨 1 品種、173 本）
- ⑤世界の梨園 2,000 m²
（和梨 62 品種、洋梨 36 品種、134 本）
- ⑥駐車場

（乗用車約 1,000 台、大型バス 14 台収容）

このような内容で開園したのであるが、遠くは秋田県から、西は広島県に至るまで大型観光バスで連日のようににぎわっている。平日でも観光バスが 20 台～30 台は入って来る。乗用車も地元の車は少なく、名古屋や愛

知県外のナンバーが多いようである。

目的の地元農業の活性化と農業の健全な発展にとって、これでよいのかと考えさせられるほどである。しかし考えてみれば、このデンパークによって、パートの人々の仕事場が出来て農外収入が増えた事も事実であるし、公園内の植え替え用の花木の供給によっても農業収入が増えたであろうと思う。

しかし、これが日本人の熱し易く冷め易い気質を反映して一過性であることも考慮に入れなければならない。3年先が思いやられる。

これを起爆剤として、今から次の農業振興を考えなければならないのは、全国の同じような農業公園を見ても一目瞭然である。

地元としても、すでにそれを考え、昔から三河地方の風土に適した鶏を<地どり>として売り出すことを考え、愛知県畜産総合センター種鶏場で育成して実用化した。「三河地どり」と命名して、肉用鶏としてなかなかの人気であり、今は需要に供給が追いつかない有様である。これは嬉しい悲鳴であって、飼育農家を殖やしてゆけば地域の農業振興になることであり、このようにデンパークを大いに活用してゆくことを常に忘れずに、進取の気持ちを大切にすれば、地域の農業の発展につながると思うのである。

(愛知県安城市・安城文化協会)